

# 子どもの表現理解に関する親へのアプローチ —新たな作品展の提案から—

吉川 暢子  
(幼児教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

## A Parent's Approach to Understanding Children's Expression: A Proposal for a New Art Exhibition

Nobuko Yoshikawa

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要旨** 子どもたちの製作物や描画作品を単に鑑賞するといった従来型の展示方法や作品展では、親が作品を撮影することなどに集中してしまい、子どもの学びや過程を伝えることが難しい。そこで、親が子どもの表現や作品を理解できるような作品展のあり方を再考した。親子で一緒に活動するといった新しいスタイルの作品展の実施によって、親の子どもの表現への捉え方や親の意識の変容が明らかになり、今後の可能性が示唆された。

**キーワード** 作品展 親子 親の造形意識 表現理解

### 1 問題と目的

幼稚園や保育所等の施設では、子どもたちが普段の保育の中でつくった製作物や絵などの作品（以下、作品と示す）を展示する「作品展」が企画され、実施されている。子どもたちがつくった作品などを展示する展覧会については各園によって名称が違い「作品展」「造形展」などの呼称があるが、本研究においては「作品展」と統一する。

作品展は単に子どもたちの作品などを親などに見てもらうことだけが目的で実施されているのではなく、親などにそれらを見てもらうことを通して、子どもの学びや成長を知ってもらうことが目的である。しかし、作品展の現状と傾向について村田（2015）は「巧拙を比較する場になってしまっていること、保育者の表現活動の場になってしまっている」<sup>1</sup>と指摘している。

この指摘からも作品展の実施においては作品の上手、下手といった見映えに焦点があたり、本来の子ど

もの学びや成長を親に知ってもらおうといったねらいを得ることが困難である。なお、本研究に親については、子どもの養父母といった親のみではなく祖父・祖母といった保護者なども含んだものとする。

そこで、本研究では子どもたちの作品を単に鑑賞するといった従来型の展示方法や作品展のあり方ではなく親が子どもの表現や作品を理解できるような作品展のあり方を再考し、子どもの表現への捉え方や親などへの意識の変容を明らかにするものである。

### 2 作品展に関するアンケート調査

筆者は保育者を対象として作品展についてたずねたアンケート調査を行い26名の保育者（回答者の所属については幼稚園3名、保育所17名、こども園5名、その他・小学校1名）から回答を得た。

#### (1) アンケートの調査概要

調査実施方法はウェブアンケート（Forms）を使用し実施した。アンケートの実施期間は2023年11月1日

から17日までの17日間実施した。保育者へのアンケートの質問項目は 4 項目である。【質問1】から【質問5】は所属や運営母体、仕事の内容、勤続年数などであり、【質問6】は作品展をする意味・意義について、【質問7】は作品展を実施するにあたり悩んでいることや迷うことなどについて、【質問8】は作品展を通して見ていただく親の方に伝えたいこと、【質問9】はその他（作品展に関する事など自由にお書きください）を自由記述でたずねた。なお、本アンケートの実施に際し、個人が特定されるような内容は含まれていないこと、作品展のありようやそれに関わる保育者の考えを明らかにするために研究・調査していることを説明した上で回答を得た。記述式の回答については、誌面の関係上一部抜粋して記載している。表記は原文のままである。

## (2) アンケート結果

【質問6】の作品展をする意味・意義についてたずねた質問では、「日々の保育の中で制作した作品を、園全体を通して保護者に見てもらおう機会」（公立保育所・副担任・2年）、「子どもが造形に興味をもつきっかけになり、取組むことで素材の性質や道具の使い方を知ることができる」（公立保育所・主担任・28年）、「子どもの育ちを親子で感じられる」（企業保育所・主担任・25年）、「上手い下手ではなく、作った思いや背景があること」（小学校・教諭・15年）といったように子どもの学びや成長を親に知ってもらおう機会として作品展の意味や意義を考えている保育者がいた。しかしながら、「恒例行事なので、仕方ない」（公立幼稚園・主任・30年）というようにやらなければいけないから実施しているというような意見があった。

【質問7】の作品展を実施するにあたり悩んでいることや迷うことなどについてたずねた質問では、「作品の質」（公立保育所・副担任・2年）、「どこまで子どもの自主性を大事にするか。出来映えにこだわりすぎてしまう面が出てきそう」（公立保育所・主担任・2年）、「どのくらい同じ作品に仕上げるのか。個性をどこまで広げるか」（企業保育所、副担任、1年）、「どこまで手を加え見せ方を工夫するか」（こども園、10年）というように作品の出来映えや完成度について、どれだけ保育者の手を加えるのかなどの悩みがあった。その背景には、作品展における子どもの作品の出来映えをみてしまう親の見方や考えが大きく影響しているといえるだろう。

【質問8】の作品展を通して見ていただく親の方に

伝えたいことについてたずねた質問では、「子どもはこんなにも素敵な発想や考えを持っていることを伝えたいと思う」（私立保育所・主任・13年）、「作品を作っているときの子どもの思いや過程を伝えていきたい」（企業保育所・主担任・25人）といった作品展で鑑賞する際の親の見方や作品の捉え方についての願いがあった。

【質問9】の「作品展に関する事など自由にお書きください」とたずねた質問では、「保護者を意識して行っていたことが多々あった」（企業保育所・主担任・25年）「義務になってほかの遊びが出来なくなってしまうことがしんどい」（企業保育所・主任・2年目）など作品展について、子どもではなく親の目を意識してしまうことや展覧会を行うことが負担になっているといった意見があった。

## (3) 作品展で目指す学び

これらの保育者によるアンケート結果から保育者は作品展において表面的な作品の出来映えではなくつくった過程や子どもの思いなどを知ってほしいと思っていることがわかった。また、保育者が作品展を実施する上での意識に親の子どもの作品に対する見方や捉え方が大きく影響を及ぼしていることが明らかになった。

村田（2015）もまた作品展に対する親の態度や作品に対する捉え方について「子どもの言葉に耳を傾け、そこに込められた子どもの思いにゆったりと寄り添う大人の姿に出会うことは少なく、子どもの作品をどのように読み取れば良いのか、分からずに戸惑っているようにも見える。また、出来映えの良し悪しに目を向け批評したり、他の子どもと比較して優劣を付けたりといった保護者、家族が多いように感じる」<sup>2</sup>と述べている。

これらのことから作品展において、親に子どもたちの作品を見映えなどではなく理解してもらうことが重要である。

近年、幼稚園や保育所等の施設では保育の記録だけではなく、遊びの中にある学びのプロセスを可視化するためにドキュメンテーション（Reggio Children, 2017）<sup>3</sup>と呼ばれる保育記録が用いられている。ドキュメンテーションとは保育者によって子どもの言葉や活動の過程、作品等が写真やテキストなどの手段で記録されてまとめられたものである。それは、教職員のミーティングのための素材として使われたり、子どもと共に活動したり、家庭とのコミュニケーションの

道具にもなっている。作品展においても、ただ単に作品などの飾るのではなく、展示の際に過程がわかるドキュメンテーションなどのようなつくられたプロセスがわかる掲示物等が作成されている。しかし、それらを親自身が見て、子どもの作品や姿を捉え、理解しているのかについては明らかでない。

筆者は親子での「表現遊び」の実践（吉川，2016）<sup>4</sup>から親のことばかけや意識が子どもの表現（主に造形表現）に与える影響や関連性について調査し、親子がものづくりの場や「表現遊び」を共有することで、親の子育てに関する不安材料（意識や関与方法）を取り除き、親自身も場を楽しむことで子どもの表現理解につながる示唆を得ている。

そこで、親が子どもの表現を理解する手立てとして、作品を展示する従来の作品展ではなく、親子が共に造形活動を行い、そこでの親の子どもに対する意識の変化について検討をおこなった。

### 3 「子どもの世界展」の概要

K大学附属幼稚園では令和4年度から子どもたちがつくった作品を飾るといった作品展の名称を「子どもの世界展」に変更し、作品展の展示や内容を変えている。令和4年度に実施した「子どもの世界展」では単に作品を展示するのではなく、遊びながらつくる作品などを展示した。遊びながらつくっていく作品の展示であるため、作品は遊んで壊れてしまっていたものもあった。よって、親にとって作品の見方について理解することが難しく、出来映えに目が行きがちになってしまう状況があった。

#### (1) 作品展の課題－保育者のインタビューより－

例年実施してきた作品展のスタイルから展示の方法を変換した園の実践として、K大学附属幼稚園のK保育者にインタビューを行った。なお、インタビューについては2023年11月6日、17時よりK大学附属幼稚園にて1時間程度行った。なお、インタビューについてはボイスメモで記録し、AI音声認識文字起こしサービス「Notta」を利用し書き起こした。

子どもがつくったものをリズム室に並べて、見てもらうんですけど、保護者がどんなふうに作品を感じているのかなとか思って見ていたら、記念撮影の時間になってしまっていた。その子どもの作品にどういう思いがあったとか、ということじゃ

なくて、その作品を撮る時間であったり、作品の横で「はい。並んで並んで」と言って記念撮影の時間になってしまい、作品展って何だろうって思っていた。これ（子どもたちの作品）にはこんな感じで作りましたよみたいなものは写真で収め、それに吹き出しをつけて、その作品の横に置いてはいるけれども、その全員分の子供の一つずつの作品にそれをするのは、無理なので、何となくの流れだけしか書いてない。ただ、そこに目を向けている保護者もおれば、「ふーん」ぐらいな感じで流れている人もいる。また、作品はあんまり興味がないようで、子供が「きて。きて。私のこれ」と伝えても、「うん」や「かわいいやん」などの反応をしていた。また、保育者は9月末で学生の幼稚園実習が終わり、10月にはいると作品展に向けて、作品展までにつくらなければいけないというイメージで持っただけで焦っている。

以上のようなインタビューからK大学附属幼稚園での子どもの作品を並べて鑑賞する作品展の形式では、子どもの表現したことが親に伝わりにくいなどの課題があった。

子どもたちがつくった作品などを展示し鑑賞するスタイルでの作品展を行っていた際に親は子どもの作品の写真を撮影したり、作品と一緒に記念撮影することに集中しており、子どもたちがつくった作品そのものにあまり目を向けていない傾向があった。また、保育者自身も作品展には「立派なものを展示しないといけない」というイメージがあったようである。そのため、造形表現に苦手意識がある保育者にとって負担が大きく、作品展に向けて子どもたちと共に作品づくりに追われてしまい、子どもと一緒に表現する楽しさに味わうことができていなかった。そのような状況から作品展そのものの形式や内容について園内で見直しが行われた。

#### (2) 親の方への表現理解にむけて

令和5年度の「子どもの世界展」では、親子一緒に活動を楽しむことで、活動の中での子どもの気づきや言葉を聴いて感じてほしいと実施内容が企画された。親に子どもたちがどんな思いで、どんな様子で、どんな表情で作品をつくっているのか感じ、知ってもらうために、まず子どもたちの思いを実感し、表現に対する新たな気づきを知ってもらう必要があった。そこで、子どもの表現についての親の理解が得られるよう

に、大学の教員（筆者）と連携し、親子で造形活動を楽しむ体験型プログラムを実施した。また、筆者による親を対象とした「子どもの表現とは」についての講和を行い、「子どもの姿をみること」「なぜ親子で一緒に遊ぶ意味があるのかについて」の説明を行った。その際に、親に対して、子どもの活動を親が積極的に「これ、やろう」「あれ、やってみよう」と誘うのではなく、子どもたちがどのように感じるのかを見て、何を思ったかなどの子どもの声を聴き、姿を見てほしいことを伝えた。また、子どもたちと同じ目線で一緒に楽しさや面白さを共有してほしいことを伝え、活動を始めた。

### (3) 実施日

- ・2023年10月23日（月）5歳児クラス  
参加者：子ども27人、親27人
- ・2023年10月24日（火）4歳児クラス  
参加者：子ども25人、親25人
- ・2023年10月27日（金）3歳児クラス  
参加者：子ども19人、親19人

### (4) 実践内容

各クラスの内容については「光と影」をテーマに各クラスの担任と共に内容を検討した。テーマとした「光と影」について、筆者が2019年に参加したレッジョ・エミリア幼児教育研修ツアーでアトリエスタによる光と影のワークショップを体験した経験から、光や影を使った遊びが子どもたちの主体的な遊びや探究を引き出すための重要な要素であるとした。また、高松市内の幼稚園等で実践（吉川，2022）<sup>5</sup>から着想を得ている。

レッジョ・エミリア・アプローチはアートの創造的な行為によって、既存の制度や枠組みを超え表現活動の基礎をつくり出している。そのため、何かをつくりあげることが目的ではなく、子どもたち自らの行為や出会った現象、日々の出来事に意味を見出すことを大

切にしている。それはもの・環境・他者との多様な対話によって生み出される「問い」から子どもたちの探究活動が生まれている。

レッジョ・チルドレン（2008）において、光、色彩、素材、音、におい、微気候などは空間の物質的な質として考えられており、このような感覚的知覚（光、色彩、音など）は人間形成に必要な共感覚を高めるための題材の要素として多く用いられている。<sup>6</sup>

①青組・5歳児「ILLUMMEの世界—光をつくって遊ぼう！—」

Panasonic社が現在、開発している「ILLUMME」というLEDライトを使用。プログラミング「Scratch」を使い、この「ILLUMME」を光らせ、いろいろな色や光りをした空間の中で遊ぶ。親子でこの空間に入りながら、同じ色の世界を感じ、身体を動かして遊ぶ。（写真1）

材料：木材で製作した「ILLUMME」用の部屋（サイズ：1.5m×1.5m）、マット、布（白、黄色、赤）、アクリルボックス、アクリル積み木、セロハン

②赤組・4歳児「暗闇アートの世界で遊ぼう！」

「暗闇はこわい？それともワクワク？暗闇に色はあるかしら？」と、暗闇の空間の中でブラックライトを使って色や影で遊ぶ。暗闇の中の色の世界を楽しむ。（写真2）

材料：模造紙、チョーク、蛍光シール、蛍光折り紙、ブラックライト、テープなど

③黄組・3歳児「ライトコップをつくって遊ぼう」

プラスチックのコップを使ってライトをつくる。セロハンなどを組み合わせて貼り、どんな色になるのか、光らせて楽しんだ。つくったライトコップを並べてみたりして、遊んだ。また、様々なものにライトをあてて、どんな風に光るのかいろいろな光らせ方を探す。（写真3）



写真1：5歳児クラス



写真2：4歳児クラス



写真3：3歳児クラス

材料：プラスチックのコップ，セロハン，ボンド，マジック，LEDライト，トレース台，巻き段ボールなど

#### (4) 当日の流れ

##### ①時間：9時05分：はじめに（親のみ）

筆者より活動内容の説明を実施。また，表現に関する捉え方や子どもの表現の見方・かかわり方について話をした。

##### ②時間：9時25分：表現遊びの時間（子ども・親）

各クラスによって内容を決定している。

##### ③時間：11時00分：語り合いの時間（親のみ）

筆者，附属幼稚園教頭及び各クラスの親と活動について振り返り，意見交換を行った。（写真4）

\*時間は目安であり，活動内容や進捗状況によって一部，変更した。



写真4：5歳児クラスの親による語り合いの時間

## 4 親の意識と変化

### (1) アンケート調査概要

本アンケートはK大学附属幼稚園が実施した令和5年度「子どもの世界展」に参加した41名の親（5歳児17名，4歳児18名，3歳児9名）から回答を得た。親へのアンケートの質問項目は4項目であり，問1から問4は「子どもの世界展」への参加に関する質問であり，全て自由記述とした。

質問内容について，質問項目は以下4つである。

質問1：子どもの表現について印象に残っていることがあれば教えてください。

質問2：活動に参加しての感想など教えてください。

質問3：活動の中で見られた子どもの表現や言葉について，印象に残っていることがあれば教えてください。

質問4：今後の「子どもの世界展」でやってみたいことがあれば教えてください。

このアンケート調査では「子どもの世界展」に参加することで親の気づきや子どもの見方の変化について明らかにすることを目的としている。

実施方法はアンケート用紙に記入またはFormsで集めた。なお，本アンケートの実施に際し，個人が特定されるような内容は含まれていないこと，「子どもの世界展」のありようやそれに関わる親の感想や意見を明らかにするために研究・調査することを説明した上

で回答を得ている。記述式の回答については，誌面の関係上一部抜粋して記載している。表記は原文のままである。

### (2) アンケート結果

【質問1】子どもの表現について印象に残っていることがあれば教えてください。

・お友達と同じ遊びをしていますが，自分が違う方法で遊ぶのがほんとは好きなのに遊び方が間違えているのではないかと不安な様子になる時がありました。決まった遊び方ではなく，自分のやりたい方法で自信をもって遊べるようにもっと褒めてあげたいと思いました。（5歳児）

・結果や出来栄えにこだわるのではなく，その過程の中での様子を大切にすること。（4歳児）

・子供の作品出来映えに目がいきがちになるけど，結果だけをみるのではなく，子供に色々な表現や体験をさせて，子供が何かを感じられるものを増やしていくことが大切だということが印象に残りました。（4歳児）

・今日は，子供が活動を通してどこを頑張ったのかの過程を見るためのもの。幼児期はコップに水を貯めるようなもので，溢れ出るまで見れない，わからないからこそ，容器を大きくする，いろんなものを入れることが大事。（3歳児）

【質問2】活動に参加しての感想など教えてください。

・子どもが楽しんでいる様子が見られて，良い時間になりました。子ども主体で遊ぶ上で，親の関わり方が難しく感じました。どこまで提案したり誘ったりしても良いものか，遊びにおける親の役割や普段の関わり方についても考えさせられました。（5歳児）

- ・形に残る作品だけでなく、活動そのものが親子にとって良い思い出になりました。(4歳児)
- ・普段子どもと製作などをする際、どうしても親の考えを伝えてしまっていたので、今回あまり口出しをせずに一緒に製作をできて楽しかったです。(3歳児)

**【質問3】** 活動の中で見られた子どもの表現や言葉について、印象に残っていることがあれば教えてください。

- ・子どもがイリュームでピンクに照らされた部屋を見て「妖精だね」と話していたのが印象的でした。色の持つイメージを言語化してくれたことで、子どもの頭の中を少し覗けたような気がしました。また、懐中電灯で照らしたものが照らし方で大きくなったり小さくなったりするのが面白かったようで何度も繰り返して遊んでいました。(5歳児)
- ・リズム室では降り注ぐ光に「赤のとき燃えてる！あつい！となりの青い部屋に移ろう」と移動したり、「青のとき寒い」と言って布を体に巻いたり、色で温度を感じていた。(5歳児)
- ・光るとすごいねーと言って、同じシールなのに暗くなるとどうして光るのか気になっていました。(4歳児)
- ・自分の形をなぞって人型を作った後、色を塗っている時、「遊園地を周りに描く」と子どもの中にストーリーが生まれ、それを二人で作りに上げていくにつれて、子どもの表情がより明るく楽しげに見えたのが印象的でした。(4歳児)
- ・セロハンを顔にあてて「青の世界だ！」「電気がいちごだ！」と新しい発見があったようでした。絵を書いたカップを重ねて、中のカップを回すと絵が動くように見え、「洗濯機！」と喜んでいました。(3歳児)

**【質問4】** 今後の「子どもの世界展」でやってみたいことがあれば教えてください。

- ・そこにあるのに触れることのできない「光」に焦点を当てた今回のプロジェクトとても面白かったです。物質的には存在しないけど確かに存在する、匂い、気持ちなどを考えるきっかけになる取り組みは今後もあると嬉しいです。(5歳児)
- ・親子で一緒に取り組むことができる活動ができたら嬉しいです。(5歳児)
- ・今回のように、親子で何か制作するのも楽しかったのでまたの機会があれば参加したいです。(4歳児)

- ・今回初めて参加したので、他にはどんなものがあるのでしょうか…(4歳児)
- ・五感を使って楽しむ作品づくり(4歳児)
- ・例年の子どもの世界展の方が歌の発表を聞けたり、子供の作品をじっくり見ることができてよかったです。(3歳児)
- ・子供が作ることが好きなので、工作活動が良いです。(3歳児)

以上のような「子どもの世界展」に参加した親から回答が得られた。

### (3) アンケートの考察

**【質問1】** では、筆者による講和の中で大場(1996)による「子どもの表現」について紹介した際の話が印象に残っていたようである。大場は子どもの表現を氷山に見立て、表現の表の字の表しと現の字の表しの2つの概念で説明している。<sup>7</sup>

筆者はその大場の氷山の例を「空のコップ」に例えなおし、説明している。子どもの表現は体験をし、感じ、心が動くという過程を通しての表現行為を重ねた結果であり、可視化することが出来る。つまり、子どもの表現は空のコップに水が入り、そのコップから水が溢れた時に表現が生み出されるイメージであるとした。しかし、子どもの表現はいかに早く水を溢れ出させることが目標となるのではなく、コップを大きくするという、そして、何を入れるかという話を親に伝えていた。そのため、親子で活動する際には、すぐに「何をつくった」という表面的なものだけでなく、コップの中に何が入っているのかなどのプロセスを考えたようである。

**【質問2】** では、「親の関わり方が難しい」や「今回あまり口出しをせずに一緒に製作をできた」とあるように、一緒に活動をしながら自分の関わりについて改めて考えていたようであった。

**【質問3】** では、さまざまな子どもの言葉を聴きながら一緒に活動を楽しんでいたようである。その際、子どもの言葉の意味を考え、共有していた。

**【質問4】** では、次年度も親子での活動を希望する意見が多かった。これらのことから、親子での活動をただ楽しむだけでなく、意味についても親に伝えながら行っていくことの必要性を感じた。

また、**【質問1】** から**【質問4】**のうち、親が「子どもの世界展」に参加して気がついた点やこれまでの考えから変化があった意見の中から、さらに「親の気づき」「親の考えの変化」「子どもの見方の変化」の3

つの視点でアンケートを抽出した。

### ① 親の気づき

- ・結果（作品）ではなく作品をつくる過程を、子どもと一緒に製作することで、なぜこう描いたか、どんな風に描いたかなどが知れた。その時の子どもの気持ちや表情も感じることができた。製作、表現だけでなく子育てにおいても過程を大切にしていきたいと思った。（4歳児）
- ・普段の保育参加とはちがいクラスで同じ体験を共有できることで繋がりが広がったり、共有体験が互いの仲が深まっていく。多方面に良い効果が広がっていく時間であった。（4歳児）
- ・身近な大人が夢中になること、楽しむことで、子どもは何倍にも楽しく熱中できるんだなと改めて感じました。（4歳児）

### ② 親の考えの変化

- ・子ども主体で遊ぶ上で、親の関わり方が難しく感じました。どこまで提案したり誘ったりしても良いものか、遊びにおける親の役割や普段の関わり方についても考えさせられました。（5歳児）
- ・子どもの自主性を尊重し見守る努力をしたいと思います。（5歳児）
- ・最近、娘は制作にはまっており、幼稚園でも毎日、いろんなものをつくってもってかえってきます。いつもその出来栄に目がいてしまい、中には正直…（？）と思ってしまうようなものもありました。しかし、今回、一緒にライトコップをつくってみて、娘の楽しそうな表情、作品への思いを知っているからこそ“宝物”に感じます。出来映えではなく、どんな思いが込められているのか。見えない部分にも寄り添いたいと思いました。（3歳児）

### ③ 子どもの見方の変化

- ・子どもたちがそれぞれに興味があることがちがい、個性がとても出ていて良かった（5歳児）
- ・いつもは出来上がった作品を他の子との比較をしてしまっ、つい子供が何を表現したかったかということをおぎなりにしがちでしたが、一緒に参加して子どもは子どもなりに考えて私が気付かないようなところを見て発見したりだとかをしてるんだなと思うことができて貴重な経験をできたと思います。（4歳児）

以上のような親のアンケートから「親の気づき」「親の考えの変化」「子どもの見方の変化」が見られた。親と一緒に活動することで、子どもたちの遊んでいる

姿や言葉から子どもの表現の中にある学びや気づきに気がついていた。親の言葉からも一緒に活動したからこそ、子どもの想いを知り、作品を見た時の見方そのものが変化していた。これからのことから一緒に活動することを通して、親の子どもの姿や作品の見方が変化したといえるだろう。

活動の中で子どもの声を「聴く」ことは、子どもの思いや考えを受け入れるとともに他者との対話を生み出し、子どもの表現を理解することにも繋がっていく。（Carlina Rinaldi, 2006）

この子どもの声を「聴く」ことについて、カルラ・リナルディ（2006）は「他者に対して価値を与えること、他者に対して開かれていること、そしてその人が言おうとしていることに対して開かれていること」<sup>8</sup>としている。そのため、親子で活動することは、その場の子どもの想いを感じ取ることで、子どもの表現理解につながったと考える。

## 5 まとめ

本研究では子どもたちの作品を単に鑑賞するといった従来型の展示方法や作品展のあり方ではなく親が子どもの表現や作品を理解できるような作品展のあり方を再考し、子どもの表現への捉え方や親の意識の変容を明らかにした。K大学附属幼稚園で実施した「子どもの世界展」では、子どもたちの作品を見るという一方向的なものではなく親子が一緒に参加しながら活動を行うこと、親が子どもの表現を理解するための講和、親による活動の振り返りを取り入れた内容を行った。これらによって、アンケート結果から「親の気づき」「親の考えの変化」「子どもの見方の変化」といった従来型の作品展では得られない子どもの表現理解につながる学びを得ることが出来たといえる。

しかし、親の意識変容や子どもの表現理解については、一回性の活動であったため、それらの意識変容や理解が継続的に持続するかは疑問が残る。

親子が一緒に活動することは園生活の中で少なく、一緒に活動する機会はあまりないため、親子で共に活動できる機会を増やしていく必要がある。また、保育者による作品展のアンケートでもあったように、作品展の実施が保育者の負担になっている場合もある。今後は、作品展のあり方について今後も継続して捉え直す必要がある。

今後の課題として、来年度の「子どもの世界展」で

は、令和5年度で実施した「子どもの世界展」で得た効果なども踏まえ、より親に伝えたい内容を精査し、実施内容を検討していく。

## 付記

本研究の実施にあたりJSPS 科研費18K13165「子どもの表現力の獲得と形成に関わる親の学びのための造形プログラムの構築と実践」の助成を受けたものである。

## 謝辞

本研究の実施に際して、香川大学附属幼稚園の子どもたちや先生方をはじめ、「子どもの世界展」に参加された保護者の皆様には多くの協力をいただきました。感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1 村田夕紀 (2015) 「子どものための造形展 ―その実践と考察―」『四天王寺大学紀要』第60号, p.553
- 2 村田夕紀 (2015), 同掲書, p.553
- 3 Reggio Children (2017) 「レッジョ・エミリア市自治体立施設機構の幼児学校と乳児保育所 自治体立乳児保育所と幼児学校の事業憲章」, p.45
- 4 吉川暢子 (2016) 「親子での表現遊びに関する意識と影響―事前事後のアンケート調査から―」『美術教育学研究』48巻, p.417-424
- 5 吉川暢子 (2022) 「芸術士®の実践における光を使った遊びに関する一考察―ルミボードを用いた活動事例から―」第75回日本保育学会, p.269-270
- 6 レッジョ・チルドレン／ドムス・アカデミーリサーチセンター, 田邊敬子訳 (2008) 『子ども, 空間, 関係性―幼児期のための環境のメタプロジェクト―』学習研究社, p.45
- 7 大場牧夫 (1996) 『表現原論』, 萌文書林, p.178
- 8 Carlina Rinaldi, 2006, "In Dialogue with Reggio Emilia", Routledge, p.116. カンチェーミ・ジュンコ・秋田喜代美編 (2018) 『子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践』, 萌文書林, p. 22